

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の句式編

【第5回】二重否定

だいたい漢文を学び始めてつまづく奴って、否定の形が多いんだな。

それも部分否定と二重否定の形だよ。

なに？ 部分否定なら任しといてくれって？ うんうん、ちゃんと復習したんだな？ いいぞ！

じゃあ、2つ目のハードルいくか？ 今日は二重否定の形をマスターしてもらおう。

1. 二重否定とは？

二重否定ってのは、その言葉の通り、2つの否定の組み合わせからなる形式のことだよ。

もうちょっとちゃんと説明すると…

否定副詞、たとえば「不」とか「非」とか「未」、あるいは非存在・非所有を表す動詞「無」、無指の代詞「莫」を、2つ組み合わせると二重に否定して、結果的に肯定を表す形式のことよ。

え？ 「二重否定は強い肯定を表すんですよ？」だって？

確かに強い肯定を表す二重否定もあるけど、二重否定の全部がそういうわけでもないんだぜ。

まあ、そうはやるなよ、順番にマスターしていこうぜ。

2. 否定の語を連続して二重否定を表す形

「無」「莫」などと「不」「非」などを組み合わせると、「無不」とか「無非」、「莫不」「莫非」、

あるいは「非不」「非無」などの形をとって二重否定を表すことがよくあるんだ。

これには表す意味として2種類あるんだよ。

① 「無不」「無非」と「莫不」「莫非」が強い肯定を表す形

まずは、「無不」の形からいこう。

道無不通。

▼道通ぜざるは無じ。

▽道に通じていないものはない。(=道はすべて通じている。)

これは本来存在文だよな？

存在文は構造上の目的語が意味上の主語になって、構造上の主語がその存在する範囲を表すんだっただけ。というところは、この例なら、「不^ル通^セ」(通じないもの)が存在しない範囲が「道」になるわけだ。ん？よくわからんて？

要するに「通じないもの」が「道」に存在しない、つまり道はすべてに通じてるってことだよ。

さて、ここが肝心なところで、「道無^シ不^ル通^セ」は端的に言えば、イコール「道はみな通じている」ってことになるだろ？

だから、**結果的には肯定、それも強い肯定になるわけだ。**

そして現代の中国では、この「無不」を1つの副詞句として、述語「通^ス」を修飾するって考えてるんだ。ん？またよくわからんて？

つまりな「無不」を「しないものは存在しないものとして」(する)「って働きの副詞、もつと言っなら「みな」(する)「って意味の副詞とみなしてること」。

「無不」を「みな」に置き換えてみるよ。「道(みな)通^ス」になるじゃんか。

つまり「無不」は「みな」って意味の副詞と同じってことになるわけさ。

古典中国語は、働きによって品詞が決まるんだから、「無不」は1つの副詞、すなわち複合副詞ってことになるんだ。

でもでもでも！ 本来の構造はやっぱり存在文だから、無理に副詞句だなんて思う必要はないんだぜ。ためぐち先生だって、そうは考えてない。

ただな、ひとつ役に立つから覚えておけよ、二重否定の文ってややこしいじゃないか。

「無不」が出てきた時、その横に「みな」って書いてみな。

そしたら、めっちゃ簡単な漢文になるから。1つのテクニクだけ。

(なんじゃこりゃー！)

みな

(おおー簡単だ！)

道 無^シ不^ル通^セ

↓ 道 無^シ木^ノ通^ス

↓ 道 みな通^スず。

↓ 道はみな通じる。

ところで、この「無不」の訓読なんだが、「ゝぎるはなし」と「は」を入れて読んでるよな？

これは絶対じゃなくて「ゝぎるなし」と読んだって別にいいんだぜ。

「ゝぎるものはなし」の「もの」を削った読み方になってるわけだ。

「は」を入れようが入れまいが、どっちだっていいんだけど、このためぐち先生は、いつも「ゝぎるは」と読んでるぜ。

次、行こう。

名士無_二不_レ至_ラ者_一。

▼名士^{めいし}至^{いた}らざる者^{ものな}無^し。

▽著名な人物で来ないものはいなかった。(＝著名な人物はすべて来た。)

これは名詞句を作る構造助詞「者」を伴う形。

つまり、「不_レ至_ラ者」で「来ない人」という名詞句になつてゐるわけ。

ということは、典型的な存在文で、存在主語「名士」＋述語「無_シ」＋目的語「不_レ至_ラ者」の構造だよ。

これでわかつたろ？ さっきの「道無_シ不_レ通_セ」も、構造助詞「者」を置けば「道無_シ不_レ通_セ者」となつて、同じ意味を表すことになる。

要するに、「無_シ不_レA」であるのが「無_二不_レA者_一」であろうが、構造的には何も変わらないんだよ。

だって「無_シ」は述語動詞だぜ。

その後の「不_レA」も「不_レA者」も目的語である以上、「者」の有無にかかわらず名詞句でなきゃならないわけだ。

それを「道無_シ不_レ通_セ」の「無不」は副詞句とみなしているのは、副詞のように働いているように見えるからに過ぎないんだよ。

つまり働きから品詞名を与えてるってのはそついつことなのさ。構造的にはやっぱり存在文なんだよ。

ところで、訓読して読んでる君らの場合注意しなきゃならないのは、さっきの「道無_シ不_レ通_セ」は「無不」を「ざるはなし」と連続して読むことになるんだが、「道無_シ不_レ通_セ者」とか「名士無_二不_レ至_ラ者_一」のような場合は連続して読むではないってことだな。

巷の参考書なんかには「無不_レ」の形を取り上げて「_レせざるはなし」と読むと書いてあることが多いけど、いつもそつ読むとは限らないってこと。ここに句形丸覚えの落とし穴がある。

◎ポイント！…「二重否定」「無不A」は、結果的に「みなAする・すべてAする」という強い肯定を表す。

無_シ不_レA。

▼Aせざるは無^な。

▽Aしないもの「_二と_一」はない。↓みなAする。

無_二不_レA者_一。

▼Aせざる者^{ものな}無^し。

▽Aしないもの「_二と_一」はない。↓みなAする。

- ・左の形のように、常に「無不」を連続して読むとは限らないので注意。
- ・「Aせざる無_シ」と「は」を入れずに読んでもよい。

天之所覆、無非朕臣。

▼天の覆ふ所、朕が臣に非ざるは無し。

▽天が覆うところは、わが臣下でないものはない。(＝すべてわが臣下である。)

これも構造的には存在文。「不」ではなく否定的判断を表す「非」を伴う形だよ。

例によって「無非」は、中国では1つの副詞句として述語「朕臣」を修飾するとみなされてる。

つまりここでは「それでないものはないものとして」である(「」って感じかな。

つまり、「そうそう、**「みんな・すべて」に相当するわけ。**

だから、「それでないものはないものとして我が臣下である」ってのは、つまり「みんな私の臣下である」ってことになるんだ。

だけど構造的にはやっぱり存在文で、「無」が述語動詞、「非朕臣」がその目的語になるんだぜ。

え？それはもつわかったって？

この「無非」の訓読も、「」にあらざるはなし」と「は」を入れて読んでね。

これも「」にあらざるものはなし「の」もの「を削った読み方なんだ。

「あらざるな」と読もつが「あらざるはなし」と読もつが、どっちでもOK。

ちなみに…えっ、どつせためぐち先生は『あらざるはなし』と読んでるって言いたいんでしょ？「だって？…はい、そうです。

ところで、この「無非」の形も、後に構造助詞「者」を伴って、「無非A者」という形をとることがある。

さっきの例で言えば、「無非朕臣者」と表現することもあるってことだね。

これも、「無非」がいつも「」にあらざるはなし「と、「非」から「無」へと連続して返って読むとは限らないというところで、注意して読んでほしい。

そしてこのことは、「無非」が「無不」と同じく、ひとつの副詞句として機能してるっていうよりも、やっぱり「非朕臣者」が、「無」の目的語である存在文なんだということをよく示してるって思うんだ。

◎ポイント…「二重否定」「無非A」は、結果的に「みなAである・すべてAである」という強い肯定的判断を表す。

無非A。

▼Aに非ざるは無し。

▽Aでないもの「」はなし。↓みなAである。

無^シ非^{ザル} A^ニ者[。]

▼Aに非^{あら}ざる者^{もの}無^シ。

▽Aでないもの「こと」はない。↓みなAである。

・左の形のように、常に「無非」を連続して読むとは限らないので注意。

・「Aに非ざる無し」と「は」を入れずに読んでもよい。

人莫^シ不^ル慕^ハ之^ヲ。

▼人之^{ひと}を慕^{した}はざるは莫^なし。

▽人は、誰も彼を慕わないものはいなかった。(誰もがみな彼を慕った。)

これ、読み方としては、前の「無^シ不^ルA^セ」と同じだろ? でも、これは存在文じゃない。

だって「莫^シ」は無指の代詞だからな。

だから、「莫^シ不^ル慕^ハ之^ヲ」は、「存在しない人が彼を慕わない」ってことになって、結果的に「みな彼を慕う」ってことになるんだ。

これもこれまでと同じように、中国では「莫不」を1つの副詞句とみなしてるけど、要するに副詞と同じ位置に「莫不」が置かれるからだよね、もうわかったらろ?

◎ポイント……二重否定「莫不A」も、結果的に「みなAする・すべてAする」という強い肯定を表す。

莫^シ不^ルA^セ。

▼Aせざるは莫^なし。

▽Aしないもの「こと」はない。↓みなAする。

・「Aせざる莫し」と「は」を入れずに読んでもよい。

え? 質問があるって? うん、なんだい? 「莫^シ不^ルA^セ者[。]」の形はとらないのかって?

いい質問だねえ…。結論からいうと、例がないわけじゃない。でも、うんと少ない。

基本の否定のところでも述べたように、「莫^シ」は指すもののない無指代詞だから、もし「者」を伴って、たとえば「莫^シ不^ル慕^ハ之^ヲ者[。]」という形だと、「存在しない人が、彼を慕わない人だ」と解釈するか、あるいはこの「莫^シ」は「無^シ」と同義の動詞として用いられているかとか考えようがなくなるんだ。

ためぐち先生も、さてどっちだろう? と迷うところなんだが、例がないわけじゃない。でも、ほんとにうんと少ないんだよ。

尺地^モ莫^レ非^ニ其^ハ有^ニ一也、一民^モ莫^レ非^ニ其^ハ臣^ニ一也。

▼尺地^{せきち}も其^その有^{いう}に非^{あら}ざるは莫^なきなり、「一民^{いちみん}も其^その臣^{しん}に非^{あら}ざるは莫^なきなり。

▽わづかな土地もその(＝殷の)領土でない所はなく(＝すべてその領土であり)、一人の民もその臣下でないものはいない(＝すべてその臣下である)。

これは無指代詞「莫^レ」と否定の副詞「非」からなる二重否定の形だ。

「存在しない土地がその領土ではない」「存在しない民がその臣下ではない」と、ちょっとややこしいけど、つまりは「どの場所もすべてその領土である」「どの民もすべてその臣下である」という**強い肯定を表す**ことになる。

これも中国では「莫非」を1つの副詞句とみなしてる。

でも、無指代詞「莫^レ」の基本の意味に基づいて理解すれば十分じゃないかな？

これも、「あらざるはなし」と読んで、「あらざるなし」と読んで、どっちでもいい。

◎ポイント……二重否定「莫非A」は、結果的に「みなAである・すべてAである」という強い肯定を表す。

莫^レ非^ニA。

▼Aに非^{あら}ざるは莫^なし。

▽Aでないもの「こと」はない。↓みなAである。

・「Aに非^{あら}ざる莫^なし」と「は」を入れずに読んでもよい。

②「非不」「非無」が別に事情があることを表す形

二重否定というと、すぐに「強い肯定」だと思い込んだり、そう説明する先生もあつたりするんだが、実は、強い肯定を表さない形もあるんだよ。

「非^レ」という副詞は、否定的判断を表すじゃないか。「〜ではない」という判断だよ。

それが「不^レA」「Aしない」を後に伴って「非不A」の形をとれば、当然「Aしないのではない」という判断を示すことになるじゃないか。

それは「もちろんAする」なんて強い肯定ではなくて、「Aしないわけではない」という意味を表すことになるだろう？

これが、別に事情があることを示すことになるんだよ。

非^レ不^レ惡^レ寒^也、以^為三^レ侵^レ官^之害^甚於^二寒^一。

▼寒^さきを惡^くまざるに非^ぶざるなり、以^て官^を侵^すの害^は寒^さよりも甚^{はな}だしと為^す。

▽寒^さを憎^まないわけではないのだ、職^分を侵^犯する害^は寒^さよりもひどいと判断^{した}のだ。

『韓非子』に出てくる有名な文。昔、戦国時代は韓の国の昭侯^てて君主^が、酔^つ払^{つて}寝^ちゃったんだ。君^らはもちろん酒^{なんぞ}飲^{んだ}ことあるはずがないんだが（ないよな？）、酔^{つて}る時には体^が火^照つても、寝^{てる}うちに冷^えちやうんだよ、寒^いぞ。

いかにも寒^{そう}なのを、冠^を管理^{する}役^人が見^てたんだ。そこで昭侯^{の上}に衣^をか^{けて}あげたわけ。

そしたら、昭侯[、]目^を覚^{ました}時[、]喜^{んで}、側^近たち^に「誰^が衣^をか^{けて}くれたんじゃ？」と聞^{いた}わけ。側^近たちが「冠^を管理^{する}者^{です}」と答^{える}と、昭侯^はなんと衣^を管理^{する}役^人と冠^を管理^{する}役^人の両^方を処^刑しちやう。

え？なんで？って思う^{だろ}？理由^はこうや。

衣^を管理^{する}役^人を罰^{した}のは、自^分のす^{べき}仕事^をしてないから。

そして、冠^を管理^{する}役^人を罰^{した}のは、自^分の職^務をこ^{えて}、他^人の職^務に手^を出^{した}から。

法^{による}政治^{を行う}上^{では}、それ^{ぞれ}の家^臣が自^分の決^められたす^{べき}仕事^をきちん^とこ^なすことが大^事で、勝^手な判断^で他^人の仕事^に手^を出^{したり}することは許^{され}ないんだ。

情^{なんて}無^用、法^で定め^{られた}通^{りに}家^臣を動^かす、それが戦^国時^代の君^主には絶^対必要^だと韓^非子^は説^{いた}わけだ。

さて、そんな話^{の中}で出^てきた^{のが}、この一^文だ。

昭侯^{にと}つて、「不^レ惡^レ寒[」]（寒^さを憎^{まない}）ということが「非[」]によ^{つて}否^{定的}判断^{され}たんだ。つまり、「寒^さを憎^{まない}のではない[」]だよ。

これ^を二^重否^定だから^とい^{つて}「も^ちろ^ん寒^さを憎^む」と訳^す先生^もある^{んだ}が、そ^うじ^ゃない。

むしろ「寒^さを憎^{まない}わけ^{ではない}」ぐ^らいの意^味で、冠^を管理^{する}役^人を殺^{した}の^{には}、別^の事^情があ^つた^{のだ}と釈^明して^るんだよ。

◎ポイント……二重否定「非不A」は、「Aしないわけではない」と釈明して、それには別に事情がある
ことを示す。

非^ス不^レ不^レ惡^レ寒^也。

▼Aせむに非^ぶ。

▽Aしないわけではない。

子罕^ハ非^レ無^キ宝^也、所^レ宝^者異^{ナル}也。

▼子罕^{しかん}は宝^{たから}無^なきに非^{あら}ざるなり、宝^{たから}とする所^{ところ}の者^{もの}異なるなり。

▽子罕は宝がないわけではない、宝とするものが違うのだ。

これもまた有名なお話でね、昔、宋の国の人で、宝玉を手に入れた人がいたんだ。

この人、その宝玉を大臣の子罕に献上しようとしたんだが、子罕は受け取ろうとしない。

偽物ではありませんよ、宝玉の細工職人に見せましたが、本物です！って言ったんだが、それでも子罕は受け取らなかったんだ。

子罕いわく、「私は貪らないことを宝だと思うが、そなたは宝玉を宝だと思っているんだろ？ それなら、そなたが宝玉を私に与えれば、どちらも宝を失ってしまうではないか。それぞれ宝だと思つものをもつていの方がよからう」ってな。

これを踏まえて、宋の国の長者が言ったのがこの例文だ。

子罕について、「無^キ宝^{（宝がない）}」ということを「非^ス」で否定的判断したんだよ。

つまり「宝がないわけではない」、宝とするものがそもそも他のひとと違うんだよって、**別に事情があることを示した**のさ。

これも強い肯定ではないだろ？ 二重否定⇨強い肯定だと思ひ込んでると、意味を取り違えちゃうぞ。

◎ポイント！…二重否定「非無A」は、「Aがないわけではない」と釈明して、それには別に事情があることを示す。

非^ス無^キA。

▼A無^なきに非^{あら}ず。

▽Aがないわけではない。

3. 助動詞を伴つ二重否定の形

基本の否定のところ、否定副詞と可能的助動詞を用いて、不可能を表す表現つてのを教えたら？ 覚えてるかい？

ほら、「不^ハ能^{スル}A」とか「不^カ可^スA」とか「不^{スル}得^ルA」ってやつ。

それぞれ「できない」理由は微妙に違うけど、「Aすることができない」って意味を表すんだっただね。

この「A」（Aする）が「不^レA」（Aしない）に変わると、「二重否定になるわけさ。

魏王曰聞^キ其^ノ毀^レ不^レ能^ハ不^レ信^ト。

▼魏王曰其の毀りを聞き、信ぜざることを能はず。

▽魏王は毎日その誹謗を聞き、信じずにはいられなかった。

戦国四君^{しきく}って知ってるかい？ 中国の戦国時代に大活躍した4人の公子だよ。

公子^{こうし}ってのは、諸侯の長男以外の男子をいうんだ。

君^{きみ}らが知ってるとしたら、「鶏鳴狗盜」の逸話で名高い斉の孟嘗君^{もうしょうくん}かな？

ほかに趙の国の平原君^{へいげん}、楚の国の春申君^{しゅんしん}、そして魏の国の信陵君^{しんりやう}がいる。

最後の信陵君は、身分の上下を一切気にせず、見どころのある人物には常に礼儀正しくもてなして食客にした人物でね、諸侯の間でもめちゃくちゃ評判がある人だったんだ。

この信陵君が、魏の国の將軍になると、その威風は天下にふるったもんだから、魏の国を攻めたいと思つてた秦の国は困ったもんだと悩んだんだよ。

そこで、秦王は魏の国に大金をばらまいて、魏王に信陵君の悪口を言わせたんだ。「諸侯は信陵君のことだけを知っていて、魏王のことなんかまるで念頭にありません。信陵君もこの機に王座を狙ってます」ってさ。

魏王は毎日々々そんな悪口を聞かされて、信じずにはいられなくなったんだよ。

「不^レ能^ハ不^レ信^ト」は、「不能」（できない）の目的語に「不信」をとってる形だね。

つまり「『信じないでいる』ことはできない」から、「信じずにはいられない」という意味を表すわけだ。助動詞は動詞を目的語にとつて意味を添えるけれども、その目的語の動詞は副詞の修飾をうけることがあるだろ？

ここでは「信」が否定副詞「不」の修飾をうけてるんだよ。

したがって、「不^レ能^ハ不^レA」は、「Aせずにはいられない・Aしないとしようとはできない」という意味を表すことになる。

人^ハ不^レ可^ク不^レ自^ラ勉^ム。

▼人は自ら勉めねばかひらひ。

▽人は自分で努力しなければならぬ。

これはもう君たちのためにあるような言葉だな。

どんなにこのためぐち先生がわかりやすく教えたって、君らに理解しよう、身につけようって姿勢がなけ

れば、どうにもならんからな。

それはさておき、この「不^カ可^ル」は、「不可^カ」(できない・してはいけない)が、目的語に「不^カ自^ラ勉^ム」(自分で努力しない)をとる形だ。

つまり「『自分で努力しない』ということができない」または「『自分で努力しない』ことが許されない」から「努力しなければならない・努力しないわけにはいかない」という意味になるわけ。

要するに、「不^カ可^ル不^カA」は、「Aしないわけにはいかない・Aしなければならない」という意味を表すんだ。

有^ル功^ハ者^ハ不^ル得^ル不^ル賞^セ。

(史記・范雎蔡列伝)

▼功^コ有^アる者^ハは賞^シせざるを得^ズず。

▽功績のあるものは褒美を与えなければならない。

この例は、「不得^ル」(できない)が「不^ル賞^セ」(褒美を与えない)を目的語にとる形。

これも「『褒美を与えない』ことができない」から「与えなければならない」という意味になるんだ。

つまり、「不^ル得^ル不^ルA」は、「Aしないわけにはいかない・Aしなければならない」という意味を表す。

◎ポイント……不可能を表す「不能^ハ」「不可^カ」「不得^ル」は、その後「不^ル」(しない)をとって、「不^ル能^ハ不^ル」(不能^ハ不^ル)は、重否定を表す。

不^ル能^ハ不^ルA。

▼Aせざる(こと)能^ハはず。

▽Aせずにはいられない。・Aしないでいることはできない。

・「Aせざる能はず」と「不^ル」をつけずに読んでみよ。

不^ル可^カ不^ルA。

▼Aせざるべからず。

▽Aしないわけにはいかない。・Aしなければならない。

不^ル得^ル不^ルA。

▼Aせざるを得^ズず。

▽Aしないわけにはいかない。・Aしなければならない。

これらの形は、前にも言ったように「不^ル能^ハA」「不^カ可^ルA」「不^ル得^ルA」のAが「不A」になって

るだけなので、慌てずに助動詞の意味を考えれば文意はわかるのだが、まあややこしいといえばややこしいから、いつそのこと丸覚えしちゃうのも一つの手だな。

可能的助動詞以外に、意志の助動詞「敢^ア」を否定副詞「不」と組み合わせさせて二重否定を表すこともあるぞ。

趙王恐、不^レ敢^テ不^レ献^セ。

▼趙王^{てうわうおそ}恐れて、敢^あへて献^{けん}せずんばあらず。

▽趙王は(秦王を)恐れて、(和氏の璧を)献上せずにはいられない。

和氏の璧ってのは宝玉なんだけど、いわば三口のヴィーナスなみの芸術品なんだ。

これを趙の恵文王が手に入れたわけ。

そしたら秦の王様が譲ってくれと言ってきた。

それも強大な軍事力を背景に、十五の都市と交換してくれて、まあ断れない雰囲気だね。

これを秦の国まで使いして、見事に持ち帰ってきたのが藺相如^{りんしやうじよ}で、そのお話は、構造編の第3回助動詞編でしたよな。

「完璧」って言葉のもとになったお話だったね。

さて、「不^レ敢^テ A^セ」は、しにくいことを押し切ってまで「Aしようとは思わない」という意味だったよな？

そのAが「不A」(Aしない)になってるだけだよ。

だから、「不^レ敢^テ不^レA^セ」は、しにくいことを押し切ってまで「Aしないでおうとは思わない」という意味になる。

秦王に和氏の璧を譲らなければ、何されるかわからんじゃないか！大軍で攻め寄せてくるかもしれないぞ！趙王はそれが怖くて、「献上しないでおうとは思わない」「つまりは「献上せずにはいられない」「わけさ。二重否定だからといって、これも強い肯定を表してるわけじゃない、むしろ消極的な肯定ともいうべきで、しがしがないだよ。

ところで、この「ずんばあらず」「は「ずんば」とあるからといって仮定表現じゃないんだぞ。

もともと日本語の打消の助動詞「ず」を「ず」で打ち消すことなんてないじゃないか。

でも、訓読では「不」から「不」に返ることになるから、「ず」を「ず」で打ち消さなきゃならなくなる。

そこで、訓読の工夫で「ずあらず」と読んだんだ。

この「ずあらず」は後「は」の「し」に「し」がまるわけ、いわば「せむ」の未融合なんだよ。

それを「は」を加えて強めて「ずはあらず」とし、撥音「ん」を入れてさらに強めて「ずんばあらず

ず」となったわけ。いいかな？

◎ポイント……「しにくく」ことを押し切って「しにくくしない」という意味の「不敢」が後に「不」をとって、「二重否定」になり、消極的な肯定を表す。

不_二敢_一不_レA_{。セ}

▼敢_あへてAせずんばあらず。

▽Aしないでござうとはしない。・Aせずにはいられない。

4. 副詞を伴う二重否定の形

二重否定には、他にも色々あってな、今度は副詞を伴う形を説明しよう。

まず、過去の経験を表す「嘗_カ」を伴って、結果的に「いつも」した」という意味を表す形式があるんだ。

毎_ニ奏_ス一篇_ヲ高帝未_ニ嘗_テ不_レ称_ス善_{。セ}

▼「一篇を奏する毎に、高帝未だ嘗て善しと称せずんばあらず。」

▽(文章) 一篇をさしあげるたびに、高帝は素晴らしいと称賛なさらないことはなかった。

「未_ダ嘗_テA_{。セ}」は、「まだAしたことがない」という意味だろう？

そのAが「不A」(Aしない)になっているだけだ。

つまり、「未嘗」が「不A」(Aしない)を修飾した「未_ダ嘗_テ不_レA_{。セ}」の形は、「まだ『Aしな

かった』ことはいない」という意味になる。

それってどういうこと？「いつもAした」ってことだろう？

恒常的に実現したってことだ。

この「未_ダ嘗_テ不_レA_{。セ}」も、「不」から「未」に返ってよまなきやならないから、「ずんばあらず」で

「ずんばあらず」って読むんだよ。

ちなみに、これと同じ意味を表す形には「曾_カ」(曾_カ用いた「未_ダ曾_テ不_レA_{。セ}」もある。

◎ポイント……過去の経験を表す副詞「嘗_カ」を伴う「不嘗」が後の「不」を修飾して二重否定になり、結果的に恒常的な実現を表す。

未^ダ嘗^テ不^レ「A」。

▼未^イだ嘗^カてAせずんばあらず。

▽まだAしなかったことがない。(↓いつもAした。)

・「嘗」と同じ意味の「會」(嘗)を用いることもある。

否定副詞「未」や「不」が、必ずそつなえることを表す「必」を伴って、「未必」や「不必」の形をとり、それが「不A」(Aしない)を修飾する「不」もめめ。

つまりさ、「未^ダ必^ス A」は、「必ずAするとは限らない」「っていつ必定の否定を表すって、部分否定のところを説明したじゃないか。

そのAが「不A」になつてただけだよ。

だから、「未^ダ必^ス不^レ A」は、「必ずしもAしないとは限らない」という部分否定を表す二重否定になるんだ。

王氏之文、未必不善也。

▼王氏の文は、未必^イ必ずしも善^ヨからずんばあつてなるなり。

▽王氏(王安石)の文章は、必ずしもよくないわけではない。

この例が「未必^ダ善^カ也」だったら、「必ずしもよくはない」(↓必ずよいとは限らない)という部分否定になるね。

ところが、「未必」が修飾するのは「不善^カ」(よくない)だから、「必ず『よくない』とは限らない」って意味になる。

この「未」は「まだ」って意味じゃない、「不」の婉曲表現なんだよ。

「不」と言い切るのを避けてやんわり否定してるんだ。

この訳を見てもわかるように、この二重否定も強い肯定じゃないだろう？むしろ消極的な肯定だね。

弟子不必不如師、師不必賢於弟子。

▼弟子は必ずしも師に如^シかざんばあらず、師は必ずしも弟子よりも賢^{ケン}なり。

▽弟子は必ずしも師に及ばないとは限らず、師は必ずしも弟子よりも賢いとは限らない。

いやあ、冷や汗の出る例文だよ。

君らの中にも現れるかもしれないよな、このためぐち先生を越えてくる奴が。

さて、この「不必^ス不^レ如^シ師」も、さっきの「未必^ダ不^レ A」と同じ理屈で、「不必」(必ず)

とは限らない)が「不」如「師」(師に及ばない)を修飾するから、「必ずしも『師に及ばない』とは限らない」って意味になるわけ。

「こは「未」ではなく「不」で否定して、はっきり言い切ってるんだね。

いいかい、君らはいつでもこのためぐち先生を越えちゃっていいんだぜ、できるもんならね。

さて、この2つの形も「不」から「未」へ、「不」から「不」へ返って読むから「ずんばあらず」って読むことになるんだよ。

◎ポイント…: 必定を表す副詞「必」を伴う「未必」や「不必」が後の「不」を修飾して、「必ずしもAしないとは限らない」という部分否定を表す二重否定になる。

未^ダ必^{スシモ}不^{ンハアラ} A。セ

▼未^いだ必^{かなら}ずしもAせずんばあらず。

▽必ずしもAしないとは限らない。・Aしないわけではない。

・「未」は「不」の婉曲表現で、「まだ」という意味を表さない。

不^ニ必^{スシモ}不^{ンハアラ} A。セ

▼必^{かなら}ずしもAせずんばあらず。

▽必ずしもAしないとは限らない。・Aしないわけではない。

5. 兼語文による二重否定の形

存在の兼語文ってあったろ？覚えてるよな？そう、次のような構造をとる文だよ。

普州^ニ有^リ人^ノ化^シ為^ル虎^ト。

(▽普州に変化して虎となった人がいた。)

これって、本来、

主語 述語 目的語
普州^ニ有^リ人^ノ。

←

主語 述語 述語 目的語
人^ノ化^シ為^ル虎^ト。
(兼語)

という2つの文の、前文の目的語「人」が後文の主語を兼ねて1文になったものだったよな？

普州に「人」が存在して、その存在する「人」が変化して虎になるという構造の文だ。

「人」は前文の目的語と後文の主語を兼ねるから兼語って言うんだったよな。

この形式を用いた二重否定の文があるんだよ。

存在を表す動詞「有_リ」の反対の意味の動詞「無_シ」を用いるんだ。

無_シニ書_{トシテ}不_レ読_マ。

▼書_シとして読_マざるは無_シ。

▽書物で読まないものはない。(＝読まない書物はない・すべての書物を読んだ。)

この例文は、実は次の2つの文からなる兼語文だよ。

述語 目的語

無_シ書_。

←

書物が存在しない。

主語 述語 述語

(兼語) 書 不_レ読_マ。

書物は読まない。

右の場合、まず前文で「書物が存在しない」、そして後文で、その存在しない「書物は読まない」となる。つまり、「無_シ書_。 (書物がない)」と「書_不読_マ」(書物は読まない)という2つの文が兼語「書」を介して1つになってるわけだ。だから兼語文なんだ。

「書物は存在せず」、その存在しない「書物」は「読まない」となり、頭がぐちゃぐちゃになるかもしれないが、要するに「読まない書物は存在しない」、つまり「すべての書物を読んだ」という強い肯定の意味になる。

つまり、「無_シニA_{トシテ}不_レB_セ」は、「AでBしないものはない」、「つまりは「BしないAはない」という意味になる。

ためぐち先生の場合は、「無_シニタ_{トシテ}不_レ飲_マ」(▼タとして飲_マざるは無_シ)。▽飲まない夜はない。(だな。

え？酒の飲み過ぎだった？

この兼語文による二重否定の形は、「AとしてBせざるは無_シ」と読む習慣がある。

「Bせざるは」ってのは「Bせざるものは」「Bせざることは」の省略形だよ。

◎ポイント!…存在しないことを表す動詞「無」が兼語文を構成し、その存在しない兼語の表す人や事物の動作行為が「不」や「無」によって否定される時、二重否定を表し、結果的に強い肯定を表す。

無^シ A^ト不^ル B^セ

▼AとしてBせざるは無^シ。

▽AでBしないものはない。(＝BしないAはない。・AはすべてBする。)

ところで、「無A不B」の形をとっているからといって、いつも二重否定になるとは限らないんだぜ。

たとえば「民無信不立。」は、見かけ上は「無A不B」の形をとっているけど、「民無^ク信不^レ立。」

(▼民は信無くんば立たず。)と読み、「人民は信義の心がなければ自立しない。」という意味で、二重否定の文じゃない。

だから君たちは、形の丸覚えじゃなくて、文脈を見ながら、その文がどういう構造になっているのかを慎重に見分けなきゃいかんよ。

これで二重否定の形は終わりだよ。

あと、もう一つ触れとかなきゃならん否定の形があるんだ。

6. 無条件の成立を表す否定の形

否定の形の最後は、「無」を用いて無条件の成立を表す形だよ。

ん？なんじゃそりゃ？って顔してるな。

つまりさ、「AとかBとかの区別なく」、**無条件に成立する**という**ことを表す文**だ。

無^ク貴^ト無^ク賤^ト、無^ク長^ト無^ク少^ト、道^ノ所^ニ存^ス、師^ノ所^ニ存^ス也。

▼貴^キと無^ク賤^{ケン}と無^ク、長^{チカ}と無^ク少^{セウ}と無^ク、道^チの存^{ソン}する所^{トコロ}は、師^シの存^{ソン}する所^{トコロ}なり。

▽身分の上下を問わず、年齢の上下を問わず、道が存在するところが師の存在するところである。

「貴」は身分が高い、「賤」は身分が低いって意味で、対義語だよな。

同様に、「長」は年長である、「少」は年少であるって意味の対義語だ。

それらの対立する条件を組み合わせて、「無^ク貴^ト無^ク賤^ト」「無^ク長^ト無^ク少^ト」の形をとると、それぞれ「

身分の高い低いの区別なく「年齢の上下の区別なく」という意味を表して、それに関係なく道理の存在するところが師の存在するところであって、一切の条件による区別がないことを表しているんだ。

右の例文は唐代の文章家として名高い韓愈の『師説』（師の説）にある一節なんだが、日本では名文としてよく読まれたんだ。

だから、この「無_レ貴_ト無_レ賤_ト」とか「無_レ長_ト無_レ少_ト」という形式が一般的だと思われがちなんだが、実は次に紹介する形の方が例が多い。

今謂_ハ天_ハ高_ト、無_レ少_ト長_ト愚_ト智_ト、皆_レ知_ル高_キ。

▼今天高_シと謂_ハば、少_シ長_シ愚_シと無_ク、皆_ク高_キを知る。

▽今天が高いと言え、年少の者も年長の者も、愚か者も賢い者も区別なく、みな高いことを知っている。

この「無_レ少_ト長_ト愚_ト智_ト」ってのは、さっきの形式に戻せばどうなるっ。

「無_レ少_ト無_レ長_ト、無_レ愚_ト無_レ智_ト」になるだろ？ やや冗長な感じだよな？

だからこの形式は、まとめてすきつと表現した形式ってことになる。

でも、「無_レA_トB_ト」なら、AとBが対義語、「無_レA_トB_トC_トD_ト」ならAとB、CとDがそれぞれ対義語になることを確認しててくれよ。

この形式は「A Bの区別なく、くする」という意味で、「無_レA_トB_ト」の部分が、「くする」の条件を表すから、中国ではこの用法の「無_レ」を動詞や副詞ではなく、接続詞に分類してる。

句と句をつなぐ働きをしているとみなしてるんだね。

品詞名は、働きに応じて与えられるからなんだね。

◎ポイント……「無_レ」の後に対立する条件A Bが置かれて、A Bの条件の区別なく、事実が成立することを表す。

無_レA_ト無_レB_ト |。す。 ▼Aと無_クBと無_ク、—す。

▽A Bの区別なく、—する。

無_レA_トB_ト |。す。 ▼A Bと無_ク、—す。

▽A Bの区別なく、—する。

・右の2つの形のAとBは対義語

無_二A B C D_{、ト} |。ス

▼A B C Dと無_なく、—す。

▽AとB、CとDの区別なく、—する。

・AとB、CとDは、それぞれ対義語。

これで、否定の形はクリアだよ。

みんなよくがんばったね！

次回は禁止の形にチャレンジしようぜ。

印刷・配布禁止